



同好会ひろば

第291号
R4. 5. 26
No.1

新時代の学びを支える同好会活動 ～ICTの活用を基盤とした活動の推進を通して～

「令和の日本型学校教育」の実現が、今求められています。私たち教師には、GIGA スクール構想により整備された一人一台のタブレット端末を活用しつつ、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ、主体的・対話的で深い学びの実現を目指すことが求められているのです。全員が同時に同じ内容を学習する従来の画一的な一斉授業からの転換を図り、子ども一人一人の可能性を引き出す学びを実現しなければなりません。まさに教育は、新時代になったといえます。

そのような中で、私たち教師は「令和の日本型学校教育」を担う、新たな姿を目指す必要があります。その中でも、特に大切なのは、教師としての専門性とICT活用力であると考えます。教師としての専門性を高めることについては、社会科同好会の強みが生かせられると考えます。社会科同好会の強みとは、先輩と後輩、同じ年齢層といった様々な会員が、立場や年代を越えて熱い議論を繰り返すことで、社会科教師として専門性を高めることができることです。そこで、今年度は、これまで社会科同好会が大切にしてきた社会科教師としての専門性を高めることを重視しつつ、ICTの活用に焦点化することで、新時代における同好会員一人一人の学びを支えるための同好会活動にしていくことが必要だと考えました。

そのために、ICTの活用を基盤とした活動を推進していきたいと思います。今、授業においてICTの活用は必須のものであり、ICTの活用なくして令和の日本型教育を実現させることは不可能です。そこで、授業におけるICTの活用について、授業づくり講座などの研修会やホームページ等などを通じて、同好会員にとって有益な情報を積極的に発信していきます。また、依然として新型コロナウイルスが猛威を振るっており、今後も新しい生活様式を強いられることが予測されています。しかし、そのような中でも、昨年度まで同好会活動ではICTを活用することで、会員同士のつながりを最低限確保することができました。一方で、オンラインだけでは生まれえない、本来の社会科同好会がもっていた熱量というものがあることも分かってきました。そこで、今年度は、感染症の拡大状況を鑑みながら、オンラインとオフラインを効果的に組み合わせて、活動を進めていきます。

このように、今年度はICTの活用を基盤とした同好会活動を推進することを通して、新時代における同好会員一人一人の学びを支える同好会活動にしていきたいと考えます。詳細は、社会科同好会のホームページをご覧ください、今年度の同好会活動にご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

【第291号 紙面】

新時代の学びを支える同好会活動	(p1)
社会科同好会全体会	(p2)
4月全体会・昨年度末アンケート	(p3)
子ども輝く社会科授業、今後の予定	(p4)

社会科同好会全体会

4月27日(水)、社会科同好会全体会を開催しました。コロナウィルス感染症拡大防止の観点から、オンラインでの開催となりましたが、100名を超える同好会員の皆様にご参加いただきました。誠にありがとうございました。

会の中では、社会科同好会会長の桜丘中学校渡辺範人先生よりご講話をいただきました。また、社会科研究会委員長の高橋直樹先生よりご挨拶をいただきました。

『今、社会科同好会員に伝えたいこと』

名古屋市社会科同好会会長 桜丘中学校 渡辺 範人

いつのころからか、次の言葉を、様々な機会をとらえて子どもたちに伝えるようになりました。

「我々は奇跡的にこの世に生を受けた。きっと何か意味があるはずだ。その意味を問い続けよう」

私たちは、奇跡的にこの世に生を受けました。様々な経緯を経て、社会科を愛し、教員となり、今こうして社会科同好会の一員として集っています。何かきっと意味があるはずです。



社会科同好会とは・・・

社会科同好会に名前を連ねている人たちは、名古屋の教育を中心となって推進しているという現実があります。名古屋の教育をひも解けば、教育長、教育次長、学校教育部長、教職員課長、指導室長、教育センター所長など、社会科同好会に名を連ねた人たちが役職を務めました。また、現在進行形でもあります。つまり、多様な能力や魅力をもつ人たちが極めて多いのが、社会科同好会なのです。この社会科同好会は、そのような魅力的な人たちと出会い、会話し、考え方などを体感できる会だと思います。

また、私たちは社会科を専門として教員になりました。子どもたちに授業で勝負して給料をもらっています。部活動が外部委託に移行している今、教師としての価値は、教科指導、授業に収れんされていくと思います。つまり、授業で子どもたちに影響を与える教師が、学校現場にとって大切な、すばらしい教師として確立していくと思います。逆に、子どもたちにとって魅力のない、おもしろくない、どきどきしない授業をする教師は、子どもや保護者から見放されると思います。授業で勝負ができる教師になるため、この社会科同好会で切磋琢磨していくことが、大切に重要なことだと思います。

社会科同好会員に期待すること

一つ目は、イエスマンにはならないでほしい。上の人の言うことを鵜呑みにして、全てその通りにする態度を変えてほしいと思います。もちろん正しいと思えることは、その通りにすればよいと思いますが、違うと思ったときは勝負をしてほしい。もちろん、礼儀や節度は大切です。その上で、自分の考えをしっかりと伝え、相手がどのように回答するか、試してください。教材論、授業展開など、激しく議論する機会を自分からつくってほしいと思います。

二つ目は、社会科を極めてほしい。皆さんは、社会科が好きで教員になったと思います。だ

からこそ、社会科において少しでもものが言えるようになってほしいと思います。門戸は開かれています。自分から積極的なアプローチをしてほしいと思います。

三つ目は、「こうあるべき」「こうでなければいけない」という考え方を一度取り除いてほしい。これは、教科の指導、生徒・児童指導、体験記録・研究員論文の書き方にも通じることですが、この書き方、この項目立てではないとだめだ、というものはありません。型にはまった金太郎あめはおいしくありません。新しい発想、自由な発想で何事にもチャレンジしてほしいと思います。

11月11日(金)全中社研名古屋大会

今年、11月11日(金)にウインクあいちで第55回全国中学校社会科教育研究大会が開かれます。名古屋市で小・中合わせて7回目の全国大会となります。名古屋市社会科同好会のよさである小中連携がベースとなる大会となりますよう、コロナ禍ではありますが大会参加に、ぜひご協力ください。よろしくお願いいたします。

<名古屋市社会科研究会委員長 高橋 直樹 先生>

同好会の原点は、授業力の向上。そして人とのつながりをつくることにあります。同好会活動はマニュアルやノウハウを手に入れるだけではなく、人間観や世界観をもてるようになります。そういったものを基にして、様々なことに好奇心や問題意識をもてるようになります。これらは、社会科が好きな先生たちが集まったつながりのある会だからこそ、培われてきたものだと思います。授業のことを熱心に話すだけでなく、様々な雑談を通して、新たな好奇心が芽生えたり、教科書にはない知識や解釈、考え方を手に入れられると思います。このような人間観、世界観を高めてほしいと思います。



授業をよりよいものにしていくためには、質をあげる必要があります。質をあげるためには、時間がかかります。働き方改革によって生み出された時間を活用して、質をあげるための時間にしてほしいと思います。教師という仕事は、人間を相手にしているので、24時間、365日考えている必要があります。命を相手にしている職業だということを忘れてはいけません。だからこそ、質をあげるために、同好会に参加して、ノウハウだけでなく、子どもたちに向き合うための人間観や世界観を広げてほしいと思います。

【同好会員の声 ～ 昨年度末アンケートより ～】

会員の声： オンラインなのはよいが、資料が画面上だと見づらい。会に出られなかった時に、情報が手に入れられるようにしてほしい。

→ レジューメや会の情報をHPに載せていく予定です。ICTを使った情報の送付方法を検討していきます。

会員の声： コロナ禍で仕方ないが、交流の場がなくなった。いろいろな世代の先生と出会えるような機会がないので、同好会でそのような場をつくってほしい。

→ 講座や研修会など可能なものは対面で行いたいと考えています。また、現地での参加が難しい方もいらっしゃると思うので、オンラインでも参加できるようにしていきます。さらに、「オンライン交流会」を開き、様々な世代の人と交流できる場をつくれます。



子ども輝く社会科授業

魅力あふれる教材を開発し、子どもが輝く社会科授業。
そのような授業を日々積み重ねておられる会員の先生方の実践を紹介します。



自分たちの生活を支えてくれる人々の働きを理解しようとする子どもの育成 ～小学3年単元「工場ではたらく人」「お店ではたらく人」～ 栄小学校 坂野寛明

「私たちは、どんな人に支えられているのかな？」と、子どもに問い掛けた。家族や先生など、自分と直接関わりのある人は出てくるが、なかなか広がらない。生活経験の少ない3年生にとって、それはきっと自然な姿なのだろう。そこで、社会科の学習を通して、子どもが「様々な人々の働きに支えられているんだ」と実感できるようにしようと考えた。

実感を促すには、学習の中で、子どもの興味・関心を引き出すことが大切だ。「工場ではたらく人」の単元では、食器製造会社ノリタケで働く人を取り上げた。エンブレムを給食の食器に見付けると、子どもは興味を示した。ノリタケの食器に美しい模様が付けられていることに着目させると、子どもの関心は作る人へと広がっていった。「店ではたらく人」の単元では、スーパーで働く人を取り上げた。単元冒頭、ビターチョコとキャラクターチョコを提示し、陳列棚のどこにあるのかを考えさせた。「ビターチョコは大人用だから上で、キャラクターチョコは子ども用だから下にあると思う。」子どもの予想は的中。「もしかすると、他にも工夫があるかもしれない。」と、子どもはスーパーで働く人の工夫へと目を向けていった。

これらの学習後、改めて「どんな人に支えられているのかな？」と、子どもに問い掛けた。「ノリタケで働く人は、安心して使えるように検査してくれている。」「スーパーの店員は、お客さんの願いに応えて季節に合うものを売ってくれている。」などと答えた子どもから、学習を通して、「様々な人々の働きに支えられているんだ」と実感した姿を見取ることができた。

根拠を基に自らの考えをもち、よりよい社会の実現を考えることができる生徒の育成 宝神中学校 長谷川裕記

本校の生徒の多くは交通量の多い国道23号を渡って登校している。そしてそのほとんどが大型のトラックであり、どこへ何を運んでいるのか。また、学区の近くには日本一の取扱額を誇る名古屋港があり、日本の産業を大きく支えているものが身近にある。しかし生徒たちは日本を代表する港であるという実感はなく、日本一であることも知らない生徒が多かった。そこで地理的分野「中部地方」の単元で中京工業地帯を中心に「名古屋港」を教材化し、中京工業地帯にとって名古屋港はどれくらい重要かを「自動車」「立地」「航空・宇宙」「輸入」の視点からバロメーターを用いて考え、なぜその評価にしたのかを資料から根拠を見付け考えるようにした。どの生徒も「自動車」に関する評価は最初から高く、名古屋港の輸出の中心が輸送用機械であることはつかむことができていた。しかし、同じ愛知県内にある三河港の存在を知り、評価を改める生徒もいた。他にも「航空・宇宙」に関しては評価の低い生徒が多かったが、資料から名古屋港が「航空・宇宙」の重要拠点であると考えた生徒もいた。そして根拠を基にした考えを話し合い、他者の考えを聞くことで、さらに自分の考えが深まったようであった。学習の最後にはこれからの名古屋港について考え、「身近な地域」の単元につなげることで、自分たちの生活と関連させながら、よりよい社会について考えていくことができた。

～今後の予定～

- 6月 2日(木) 19:00～ 授業づくり講座①
- 7月 27日(水) 18:30～ 小中合同部会
- 9月 8日(木) 18:30～ 小学校部会・中学校部会
- 9月 15日(木) 19:00～ 授業づくり講座②

※ 今年度より社会科同好会の「LINE」を始めます！
乞うご期待☆